

『注維摩』道生注における經典注釈法

工 藤 雅 也

周知の通り『注維摩詰經』（以下『注維摩』）は、羅什・僧肇・道生三人の注を集めて一部の書にまとめたものである。

『注維摩』がいつ誰の手によって編集されたかについては様々な議論があるが、ともかく少なくとも三者が別々に注釈し後のある時代に編集し直されたということは、法經録等の目録などによって明らかである。しかし、これまでの研究では、三人いずれかの注を取り上げて一つの注釈書として扱おうとする議論はあまりなされていないようである。そこで本小論では、『注維摩』の三者の注のうち特に道生注に着目して、その特徴、主に叙述形式について検討することを試みる。

羅什等の活躍した時代においては、「注」と呼ばれる注釈形式が一般的であったことは、現存する經典注釈や目録資料によって明らかである。かの時代にあつて、僧叡は『毘摩羅詰經義疏』『思益經義疏』を書き、道生には『法華經疏』が現存^②している。仏教における注釈は、儒教等の外典の注釈形式に倣ったと考えられるから、まずは一般に「注」とか「義

疏」といったものがどのような形式で書かれたものであるのかを確認する必要がある。

一、注釈形式の変遷

中国における注釈形式の変遷について、古勝隆一氏の学位論文^③によれば、南北朝期までの經典類の注釈形式は、大きく漢代から魏晉にかけての「注」から、南北朝時代に普及し始めた「義疏」へと推移しているという。

まず「注」は、師から弟子への伝承の学問であつた前漢代には經と注は別々に流布するものであつたが、後漢のある時期から經と注は合併され、注が經文に附属する形式が一般的となり、更に注釈者による序文が付されるようになった。これは、書物の普及と読書層の拡大によって注釈家が読者を意識するようになり、序文によって書物の価値と内容を伝え、經と注を合わせて簡便に参照できるように配慮したからである。次に「疏」についてであるが、經学の分野では、魏晉に

おいては「注」が、南北朝では「疏」が主流であったことが知られており、六朝期の「疏」の基本的な姿は、「注」のように經文が全て掲げられることのない所謂「單疏」であつて、「經」「注」と配せられるのは南宋以降である。

この「注」と「疏」の形式から見た違いは、例えば『易』について、注は『周易』十一卷」とされ「漢司空旬爽注」という原注がつくのに対し、義疏の場合『周易講疏』三十五卷」とし「梁武帝撰」となる。つまり「注」は独立した著述ではなく「經」に付加されたものであり、「疏」は「經」への依存度の低い独立した著作と見なされていた。

二、仏教における注釈形式

次に、仏教における注釈のスタイルについてみてみる。現存する六朝期以前の「注」を列挙すると①『大明度經』卷一②『陰持入經』陳氏注③『仏説人本欲生經』（道安注）④トルファン出土『維摩詰經』僧肇注写本断片⑤『注維摩詰經』（什・肇・生合注）である。このうち①④⑤いずれも単に「某經」の名であり、經文の間に小さな文字で双行に注文が挟み込まれ、②③には冒頭に「某經序」という名の序文が冠せられている。②③とも大正蔵では經疏部に収められるが、底本の高麗本では単なる經典類の中に列せられている。⑤も体裁は①④と同様であり、「注」という名称は三者の合注とし

て編集された際に付けられたものであろう。一方、現存最古の仏教義疏である道生撰『法華經疏』は、名称が「某（義）疏」であり、注序にあたるものが疏の冒頭に組み込まれ、その後經題釈・教判・科文など後の經典注釈における主要な要素を多分に含み、本文解釈にあたつて經文を全て掲げることのない独立した義疏である。

こうしてみていくと仏教における注釈スタイルは、外典の注釈の変遷に沿つて展開していることが分かる。

三、『注維摩』道生注の形式

さて、こうした注釈史を踏まえた上で、『注維摩』道生注の特徴およびその位置付けについて考察する。

まず第一に、橋本芳契氏により指摘された注釈箇所への偏りが挙げられる。僧肇が全体に満遍なく注釈するのに対し、道生は盛んに注釈する箇所があれば全くしない所もある。これには『注維摩』が編集された時削られたのではという反論が考えられるが、そのような記述は見あたらず、また法経録における三者の注解の卷数は羅什・道生が三卷、僧肇が五卷であり、元々の分量が『注維摩』に反映されていると考えられるから、合注編集時に削られたとみる必要はない。

第二に、遂語的に解釈をしていない部分が多い。僧肇のように、經典の繰り返しの細かな句に一々注したりしていな

い。例えば大正三八卷三六四頁の一頁に渡つて道生の注がないのは、その間の経文をまとめて釈しているからである。

第三に、注の区切り方として大きく経文を捉えている。これは第二の点とも関係しているが、例えば三五六頁a七行目の道生の注は、その前の二句に対する注である。このような箇所が『注維摩』全体に渡っていくつも見られる。

第四に、明らかに注句の区切り方のおかしい箇所があるのである。四〇六頁b一六行目の句(A)から四〇九頁a九行目の句(B)⁶まで道生の注句はなく、BはAの最後と対句をなすから、四〇九頁b辺りまで含めて、この部分は一続きの文章であつたものを無理矢理ばらばらにしたとみられる。これは『注維摩』の編集者が、道生の注文が經典のどの箇所に当てはまるのか判定に苦労した形跡と考えられる。

以上を総合して考えるに、道生の注は元々義疏の形式で書かれていた可能性が高いのではないかと思う。第一の点についていえば、もし道生注が「注」形式で書かれていたとしたら、経文だけの箇所があつたり注文だらけになったりしてしまい、非常に見栄えの悪い体裁の「注」になってしまふであろう。第二、第三の点について、「注」は僧肇注も道安の「人本欲生經」注も、經全体に渡つて一句一句丁寧に注釈を施しており、道生の注釈法は明らかに違った傾向を見せている。第四の点については、言うまでもなく道生注が元々「注」形

式で書かれていたなら起こり得ない編集ミスである。

『出三藏記集』卷十五の道生伝によれば、僧肇が維摩經に「注」したのに対し、道生は維摩等の「義疏」を世間に評価されたのである。『法華經疏』のように教判・科文といった多彩な要素は持ちえなかつたものの、『注維摩』道生注は元々「義疏」であつたことを主張したい。

- 1 大正蔵五五卷八三 b
- 2 出統二乙・二三・四
- 3 古勝隆一「漢魏西晋注釈学と『莊子』郭象注」(東京大学博士論文、一九九九年三月)
- 4 横超慧日「釈經史考」(『支那仏教史学』一一一)等参照
- 5 ①大正蔵八卷四七八 b ②大正蔵三三卷九 b ③大正蔵三三卷一 a ⑤大正蔵三八卷三三七 a なお④については白田淳三「維摩經僧肇單注本」(『聖德太子研究』十二) 6 A「菩薩之行凡有二業。功德也智慧也。(中略) 不尽有為。是求理不捨生死之懷。以慈悲為本。故始明之焉。」B「不住無為。是窮理將入生死之懷。以滿願為極。故始明之焉。」 7 大正蔵五五卷一一一頁 b 「閼中沙門僧肇。始注維摩世成翫味。及生更發深旨顯暢新異。(中略) 維摩法華泥洹小品諸經義疏。世皆宝焉」

〈キーワード〉 注維摩詰經、竺道生、注、義疏

(東京大学大学院)